
君ノため-15:00-

ゆめひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君ノためー15…00ー

【Nコード】

N0443Q

【作者名】

ゆめひつじ

【あらすじ】

々ある所に、永きに渡り栄華を極めた王国がございました。

昔

女様。

　　齡十四の王
仕えるのは顔の

よく似た召使。

　　さあ、ひざまずきなさい！

　　君はそこで笑っていて

緑の国を滅ぼしなさい

どうして？涙が止まらない

あ

ら、おやつの時間だわ

鐘が鳴り終わるまで、この運命は止まらない

――。

悪ノp 悪ノ召使。 ボカ

ロの曲ですが、知らない方にも知ってる方にも読んでもらえるように創っています。 オリジナルが含まれるので注意してくださいね
(・ω・、) アドバイス、レビュー受付中です↑

執筆開始日 2011/01

毎日P1は更新予定。お気に

／09

入り登録などお願いします。

序幕 君ノため

「キミを守るその為ならば、ボクは悪にだってなってやる」

そう言って、笑った貴方は誰？

そう言って、泣いた貴方は誰？

そう言って、私の手を離れた貴方は誰？

貴方の顔を覚えていないの。

貴方の名前を覚えていないの。

ねえ、聴いて？

私、王女様になったのよ。

自分の馬だって持つてるし、
綺麗な宝石だって手に入る。

蒼い髪の王子様だっているわ。

何でも願いが叶うのよ。

なのに、なぜなの？

一番簡単なこの願い。

この願いだけは、叶わない。

……もう一度だけ、貴方に会いたい。

第一章 王女

『第一章 王女』

「――何？ 何か騒がしいわね」

広い部屋にふいに響いた声に、側に仕えていた使用人が肩をビクツとはねさせる。

怯えたように俯き続ける彼女の目には、大理石に映る一人の少女。

ステーキを突き刺したフォークを手で遊ばせながら、眉間に軽く皺を寄せていた。

貴女もそう思わない？と言いたげに彼女に向けられた瞳は、強い光を放つ金色で、肩当たりで揃えられた同色の髪に似合う、黄色のドレスを身に纏っている。

少女はこの”黄の国”の王女様。

たった十四にも関わらず、この国を任された先代のたった一人の愛娘、リン・ノワードだ。

王女——リンは、使用人からの返事がないと分かったら、不機嫌そうにため息をついた。

「もう、いいわ。

食べる気が無くなったから、下げなさい」

「承知致しました」

「それと——」

仕える者たちは、皆視線を下げ一礼をし続ける。

その状態で動く者がいないのを確認すると、満足気に一度頷いてから言葉を紡いだ。

「貴方は、今日限りでクビよ」

リンの視線の先にいる彼女は、声を震わせながら、承知致しましたと小さく呟く。

その声に苛立ちを感じたのか、リンはもう一人の使用人を呼ぶと、彼女をすぐに連れていかせた。

彼女の涙が頬に伝わるのを一瞬見たような気もするが、同情なんて浮かばなかった。

私の言葉に返事をしない、貴方がいけないのよ。

ボタンと奥の扉が閉まるのと同時に、王女の前に見える一際大きな扉が叩かれた。

彼女の背を見ていたリンの目は、すぐにノックの音によりそちらを向く。

「誰かしら。入りなさい」

「お食事中、失礼致します」

扉から聞こえてきたのは、アルト調の女性の声。

燃えるような深紅の短い髪に同色の瞳という、リンの専属召使である。

異国のある大きな反乱で生き残った彼女を先代が助けたのがきっかけで、異人でありながらもこの国に忠誠を誓っていた。

リンの前まで来ると彼女は、片膝を折り、頭を垂れた。

「王女。お側を離れてしまい、申し訳ありませんでした」

「私は、もう子供ではないのよ。……それより、何か騒がしかったのだけれど」

「はい。実は、不信な者が現れまして先ほど、拘束致しました。王女との謁見を賜りたい申ししております」

いかが致しますか？と聞く彼女の言葉に行くわとだけ応えると、用人の引く椅子から立ち上がった。

この頃、謁見を申し込む者が減っていて内心退屈していたのだ。

私に逆らう者が減るのはいいことだけれど、毎日変化のない日々なんてつまらないじゃない。

カツッ…カツッ…。

磨き上げられた廊下を、靴音を大きく鳴らして歩く。

右斜め後ろには、紅の召使。

そのまた後ろに、使用人たちが続いている。

過ぎる壁には、数々の絵画が飾られており、そのほとんどがリンが特注で頼んだものだ。

その中でリンが一番気に入っているのは、真新しい海の絵。

一際豪華な額縁に入れられたその絵は、先日、青の国のカイト王子からの贈り物として城へ届いた。

それに同封してあった手紙には、今度大事な話がしたいということ。

物心がつく前から許嫁として決められていた彼からのそのお誘いに今から胸が躍っていた。

「王女」

ふとそう呼ばれ、視線を紅の召使にやると、その両手には王座につ

く際につけなければならぬティアラが乗っていた。

真ん中に琥珀色の石がはまったそれは、代々受け継がれた物でそれを頭に乗せられると鎖で縛られるような気がして昔から苦手だった。

「王女。お手を」

王座の横で差し出す召使の手に軽く触れ、そこに腰を掛ける。

高級な赤の生地に金色の刺繍を施したこの椅子は、つい一年前まで今は亡き前女王が座っていたもの。

目を上げると赤いカーペットが、壇上から一番奥の扉まで一つの道を作っている。

その天井まで届く大きな扉は両脇を兵士に固められていた。

「王女、申し訳ありません。まだ着いていないようです」

王座の隣に立ち、謝る彼女にリンは曖昧に返事を返し、下がるように言った。

では、王女。ティータイムのためのクッキーを焼いてまいりますと優しい笑みを浮かべて召使は奥へと消えた。

リンは一つため息をついて、ただ真っ直ぐ前を向き続ける。

王女　王女――。

私は紅の召使に名前を呼ばれたことがない。

いつも彼女は私を先代の後継ぎとしてしか見ていなかった。

紅の召使の命を助けた王様はもういないのよ。

今は、私が貴方の王女なのよ。

クッキーなんて嫌いよ。

お母様の作ってくれていたブリオッシュしか食べたくないわ。

リンが苛立ちを抑えるように息を長く吐いたとき、扉の向こうで慌ただしい足音が響いた。

「ようやく来たようね。王女である私をこんなにも待たせるなんて、一体どんな方かしら」

つい嫌みをこぼしてしまった口元に手を当て、王座の腕に肩肘をつく。

控えめなノックの後に、衛兵が五人ほど入り、その後ろに罪人のように両手首を鎖で縛られた者がカーペットに足を踏み入れた。

さらに扉が閉まるまでに十人の衛兵が入る。

リンはその様子を見て、顔に困惑の色を浮かべた。

その者の顔は見えない。

全身をフード付きの黒いロープで覆い、顔を下に下げているからだ。けれど、体つきから、リンと同じくらいの少女か華奢な少年に見てとれる。

「遅れてきたことに対しての処罰は後で下すわ。さっさと私の前にその者を連れてきなさい」

長々と前置きを話し始める兵を一言で制し、黒ロープの両脇にいた五人にそう命じる。

黒ロープは抵抗すると思えたが、素直に従い、五人と共に頭を垂らす。

その流れるように自然な動きから、農民ではないと感じたリンは、さらに困惑の色を強くさせ眉を寄せた。

「衛兵。この者は？」

「はっ。中庭を警備していたところ、我々が発見いたしました。少年ということ以外、素性などは未だ分かっておりません。王女への謁見を申し込んだきり、黙りこんだままでございます。本来ならば、そこで処分すれば良い話だったのですが……」

そこまで淡々と話していた、兵はそこで一旦言葉を切る。

何か言うかどうかを迷っているように見えたが、リンが足を二度鳴らすと、肩を一度震わせてから言葉を紡いだ。

「この者の顔が、リン王女に瓜二つだったのです」

「……私と？」

ワンテンポ遅れて言葉を返すと、兵は一度頷いた。

黒ローブは相変わらず、動き一つせず、頭を下げ続けている。

それが逆に不気味で、リンは王座から静かに立ち上がると、五人の衛兵を後ろに下がらせ、黒ローブだけを前に残した。

「貴方の名を言いなさい」

見下したような口調でそう言うと、彼はやや間を開けてから口を開く。

「……レン、と申します」

凜とした口調。

声代わりせず、まだ少年独特の高さを持つ声音。

そして、おもむろに手をかけフードを取ったその顔は、何もかも”
現 黄の国王女”と同じだった。

第二章 召使

『第二章 召使』

彼がフードを取ると、その場にいる誰もが息を飲んだ。

後ろで一つに束ねた金髪、そして金色の瞳は、黄の国の住民全てに共通することだが、やや左で分けられた前髪、瞳に被さる長い睫毛^{まつげ}、少し高めの鼻……彼——レンはリンに酷似していた。

「……顔を、上げなさい」

周りがざわめく中、若干震える声でリンが言うと、レンはゆっくりとそれに従った。

二人の唯一の違いといえば、目の光。

リンの可愛い大きな瞳と、レンの意志を宿す強い瞳。

その視線が交わった時、レンは眩しそうに目を細め、微笑んだ。

「会える日を心待ちにしておりました。リン王女」

カタンッ……。

リンは後ろの椅子に力無く腰を落とし、元々大きな瞳をさらに見開いていた。

優しげに細められた瞳。

遠い昔の色あせた記憶の中に、見覚えがあつた……気がした。

” 「リンっ！」 ”

彼の顔を見ると誰かの笑顔が、楽しげな声が頭の片隅にちらつく。

貴方は――。

” 「――。リン王女」 ”

リンは、軽く首を一度振った。

片隅にちらついていたものは、また奥の引き出しにしまい込む。

そしてやがて、目を閉じ、忘れていた息を静かに吐き出すと、リンの言葉を待っていたレンに向き直った。

「貴方は……何者かしら？ どこの者？」

「僕は、王女の治める黄の国のただの一国民でございます。あいにく、名字は産まれて間もない頃に捨ててしまいました」

そう自傷気味に笑うレンの瞳が、何かを伝えているように感じてまた一瞬目を引きつけられる。

だが、今度はすぐに離れた。

本来なら、城へと侵入した彼はすぐにも消されなければならなかった者。

それがリンの気まぐれにより、謁見を許し、レンの顔を知ってしまったために、かつて例を見ないほどに長く話してしまった。

顔が似ていても結局のところ、今までの者達同様に税の引き下げを求めてくるのだろう。

そして、リンの気分を損ねた罪として、王女の命を受けた兵によって消される。

そのシナリオはリンが黄の国の王女に即位してから、ずっと変わりはしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443q/>

君ノため-15:00-

2011年1月13日07時28分発行